
雪積り

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪積り

【Zコード】

N6417C

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

彼はとある公園に佇んでいると雪が降り始めた。そして思い出すのは先程の光景。そんな降り続ける雪の中で彼は一つ成長していくのだった

空から白い「ミミ」が落ちてきた。それは冷たく手のひらに落になると水滴となり、指の間から流れ落ちていく。

「……雪か」

ははつ、今の俺にはお似合いか。ドラマだと雨が多いのに俺の場合は雪か。

辺りに入気は無い、それも当たり前だ。なにせもう夜遅いし、こんな寒空の下で公園にたたずむのは俺一人だ。

『ごめんね』

思い出したくないのに、つい先程の光景がフラッシュバックする。くそつ。

俺はジャングルジムの鉄柱に蹴りを入れる。だからと黙って何かが変わるワケではなく、只単に足が痛いだけで、取りたい痛みは取れない。

何なんだよ、俺がいつたい何をしたって言つんだよ。

そんなことをいくら自分に問いかけても答えなど出るはずが無い。答えを持っているのは俺ではなく彼女だから。

……だったら、せめて。

俺は天を仰ぎ、降り続ける雪を見つめる。雪は雲の中にある水蒸気が凍つた物だと聞いたことがある。

俺の痛みも凍らせてくれないだろうか、降り続ける雪の中に立っている俺の痛みを降り積もる雪のように埋めてはくれないだろうか。だがそんな願いもむなしく。雪はただ俺の体温を下げて、辺りにうつすらと積もり始めるだけだ。

だからだろうか、俺は先程の光景を思い出してしまった。

それはこんな寒い雪空の下ではなく、暖房が効いた喫茶店の中だ

つた。

「悪い、待つたか？」

俺は彼女を見つけると向かい合いつに座り、注文をとりに来た店員にコーヒーを注文した。

「いきなり話があるっていうから、何事かと思つたよ

「うん、ごめんね。こんな時間に」

「別にかまわねえよ」

俺が怒つてないことを確認したのか彼女は笑顔を見せせる。

だが俺はそのときに気付くべきだった。彼女の笑顔が少しの寂しさが混じっていることだ。

一年も付き合つてゐるといつのこと、そのことを気付けない自分が今更ながらも悔やまれる。いや、一年も付き合つていたから…いつの間にか彼女のことをちゃんと見れなくなっていたのかもしれない。

だから、これは当たり前なのか？

降り続ける雪は何も答えない。だが俺にはそれが正解のようだ。雪は俺を痛めつけていく。

「別れよう

突然の彼女が言い放つた一言に俺は飲みかけのコーヒーを零しそうになつた。

「えっ、いや、ちょっと待て、今何て言つた？」

「別れようつて言つたの」

「何で…」

突然のことで気が動転していた俺は声を荒げながら、テーブルを叩き立ち上がる。一斉に店内の視線は俺に集中して、そのことに気が付いて俺は何事も無かつたかのように座り直した。

「別れようなんて、突然どうしたんだよ？」

「別れようなんて、突然どうしたんだよ？」

「自分の胸に手を当てて考えてみたら」

「別に俺はやましいことは無い」

そのことだけは断言できる。俺は浮気なんてしていないし、今では合コンの誘いですら断つてる。だからこそ、彼女の言っている事なんて何一つ理解できなかつた。

彼女は俺から目線をはずすと、どこか別の場所を見ているかのように遠い目をした。

「確かにやましいことはしてないと私も分かつてるけど……」

「だろ」

「けど、それだけだよね？」

「はあ？」

「私達、付き合つてたんだよね？」

「当たり前だろ」

俺達が恋人同士とうことは確かだ。普通にデートもしているし、それに他の恋人同士がやつてていることもしている。傍から見ても付き合つていることは間違いない。

「じゃあ……」

彼女の視線が再び俺へと戻る。だが俺は彼女のとまどちに目を合わせることが出来なかつた。それほど彼女は真剣な目をしていたからだ。

俺は怖氣付いていた。

彼女は溜息を付くと再び遠くへと目を向ける。

「いつからだろうね。こうなったの？」

「いつたい何のことだよ

「……まだ、分かんないんだね。けど当たり前かな」

俺は彼女の言つてゐる意味がまったく分からなかつた。いや、分かつてやるべきだったんだ、あの時は。

あの時、彼女の気持ちを察しさえしていれば、今頃どうなつてた

んだる。

取り返しが付かないと分かつても、俺は今更後悔する。

「もういいよ。じゃあ、もう連絡してこないでね」

「おい、ちょっと待てよ。そんなんで納得できるわけ無いだひつ」「俺の言葉を無視して彼女は伝票を持って席を立つ。

「おい」

呼び止める俺の言葉に彼女は振り向くことなく、その場に立ち止まる。

そして囁くように声にする最後の言葉。

「私のこと、ちゃんと見てくれていた?」

その言葉で俺はようやく彼女の言いたいことが分かった。

いつだ。いつから俺は彼女の事をちゃんと見なくなっていた。いつから俺は彼女の上辺しか見ないようにになつた。

俺はここまで鈍感だったのか? 彼女が何を思い、何を考え、何をしたかったのか。その一つさえ気付いてやれないほど俺はバカだつたのか?

自分の愚かさを悔やむように俺はジャングルジムを殴りつけた。

……痛い。ははっ、当たり前か。

痛みが俺を正気に戻してくれた。一気に寒さを感じるようになり、自分にも雪がうつすらと積もっていることにやつと気が付いた。

どうやらかなりの間この場所に立つていたらしい。俺は自分に積もった雪を振り払うと再び上を向いた。

空は黒い雲で覆われているように見えた。

これは積もるかな? 明日は大変そうだ。

そんなことを思いながら俺は帰宅することにした。

まだ痛みは取れていない、たぶん立ち直るには時間がかかるだろ

う。けど…。

ついついと積もり始める雪を見て改めて俺は思つ。
俺も降り積もる雪のよつこいろいろなことを積もらせていくのだ
るつとい。

(後書き)

そんなワケで今回は恋愛物だと思つ物を書いてみました。しかも別れ話なんて、かなり風変わりだと自分でも思つてます。とりあえず、ここまで読んでくださつてありがとうございます。今後ともよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6417c/>

雪積り

2010年10月8日15時04分発行